
S I L V E R T A I L ーシルバーテイルー

鈴刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SILVER TAIL ーシルバーテイルー

【Nコード】

N2992P

【作者名】

鈴刀

【あらすじ】

SILVER Ⅱ銀 TAIL Ⅱテイル

銀魂とFAIRYTAILのコラボ小説です！

万事屋の三人がFAIRYTAILの世界に行ってしまう、どこにでも、ありそうな小説です！

前と、はじまり変えました！

NO. 1 任O堂 DS

ふあああゝゝゝ

イテテテテ・・・

(二日酔いで頭イテエゝゝ)

「酔い覚ましに、外にでも行くか・・・」
目が覚めた銀時がつぶやく

『あゝあああ?!』

外へ出ると、

銀時が不思議な物でも見たような声で言う
正しくは、不思議な物を見つけた目で・・・

ゝ一一差し上げます一一ゝ

と書かれた段ボールが一つ、

その中には、DSが一つ

「何やってるアルか? 銀ちゃん!」

そこへ、いつものとうり、スコンプをくわえた
神楽が来た。

「あつ銀ちゃん何か、持ってるアル!」

「見せるアル!!」

「えっちょっ待て!」

おそいかつかてきた神楽に銀時が言う

「じゃあ白状するアルっ」

「エッと！DS？」

ビツビタ声で銀時が言う

「何でDS何か持ってるアルか？」

「ちよっと見せてほしいアル」

「んああ？ほいつ」

「あッッ！！！！！！」

「銀ちゃん！これF・Tって書いてあるアルよ！」

「きっと、フライドチキンつき卵かけご飯の略アル！」
目を輝かせて神楽が言う

「どんな略し方だよ！」

そこえ、すかさず銀時が突っ込む

「DS付けるアル！」

神楽がせかした声で言う
とさっさと電源をつける

そうすると

DSから光が出る

NO. 1 任O堂 DS (後書き)

あっ新八、出すの忘れてた・・・

新八ファンの方すみません！

次は、絶対出します！

てか新八どうやって出そう・・・？

b y 鈴刀

NO. 2 スーパー000ブラザーズ

DSから光が出る

そしてゲーム始まりの効果音が流れる

『テッテッテッテッテッテッ』

「マリオ・・・」

「ゲームオーバーになっちゃったアル・・・」

神楽が悲しそうに言うところへ
新八が突っかかる

「いやこれ小説でしょっ!」

「効果音なんて分かるばずないでしょっ!」

そこへ神楽が

「大丈夫アルヨ、新八」

「ちゃんとあとがきに効果音のリンク載せてあるアル」

「しかもyoutubeだから安心アル」

そう言っていると、だるそうな声で銀時が言う

「おいしい」

「いつから新八、居たんだあ」

「えっ」

「最初から居ましたよ・・・」

「ええっ、マジでか？」

「作者が書いてなくて

居ない設定になりかけてたアル！」

「……。」

新八が固まっていると神楽が空気を変えるように

「さっさとゲーム始めるアル」

「えーとまずは、キャラ名と顔を3人、入力するようだな……」

そうして

新八を置いて勝手に

神楽と銀時はゲームをすすめる

「何か名前考えるの面倒アル……」

「ンじゃあそのままでもいいんじゃないか？」

「そうあるネ」

そうやって

入力しようとするともうすでに
キャラ名と顔が入力されていた

「楽アルネ！」

NO. 2 スパロ000ブラザーズ（後書き）

何か新八のあつかいひどくて
すみません・・・

これからもこんな感じで

新八のあつかいは

ひどいです・・・

by 鈴刀

効果音のURL？

http://www.youtube.com/watch?v

UKIw4EIOM|w&feature=relat

ed

NO. 3 ついに来た！

無数の光が3人を包むと
次に視界がゆがむような感覚に
おそわれた

「「わあああああ」」「」」

そして

3人いっせいに叫ぶ

光がやみ、ゆがむような感覚が
おさまると

「.....」

「何もかわらないアル」

「あれ？」

「ここは普通、異世界に飛ぶとか
言う展開があってもおかしく
ないんじゃないか？」

3人が不思議に思っていると

【フイイイ】

「DS何かうごきだしたアル」

「now loading、」

「銀さん！何かいきなりロードし始めましたよ」

「きっと行くステージの情報とかいろいろあんだよ」

「あああそういうことアルか！」

「何、納得してんですか」

新八が、突っ込むのと同時に
また、視界がゆがみ
無数の光がDSから出る

「「わああああああ」」「」」

叫んだ後に、3人は
いつきに、気を失う・・・

目が覚めるとそこは
明らかについさっきまで
いた風景とはちがっていた

「銀さん、神楽ちゃん起きてください……！
大変ですよ
万事屋が……」

先に目覚めた新八が2人を起こそうとする

「あん？何だよ騒がしい」

「ってあれえ？」

「何アルかあ」

「うをお！」

そして明らかに違う雰囲気
に2人も呆然とする

「えふ」「えー」「あい」「あーる」「わい」
「ていー」「えー」「あい」「える」

「って何アルか・・・？」

「何か、の会社アルか・・・？」

「いや、そんなわけないでしょ」

「そうだあ、きつとそうだ」

「いやだから銀さんもお」

そんな事をしてい

ると胸がけっこう大きい

金髪の少女が歩いてきた

NO. 3 ついに来た！(後書き)

今回ほとんど

会話文だったような・・・

ついにきました

異次元に！

FAIRY TAILって

ひらがなで書くと

なんかすごく読みにくい・・・

by 鈴刀

NO. 4 きっかけは、フライドチキンから

「あのおゝギルド前でいったい何をしていらっしやてるんですか・・・？」

もちろん、話しかけてきたのは
けっこう胸の、大きい
金髪の少女だった

「えっとあなたこの会社の社員さん？」

「えっと何がですか・・・？」

「だから、
えふ、えー、あい、あーる、わい
ていー、えー、あい、える、
っていう会社の」

「いや、会社じゃないんですけど
ギルドなんですけど・・・」

「ほらあ、やっぱ会社じゃ
無かったじゃないですか」

新八が、あきれた声で言う

「じゃあ、フライドチキンも
卵かけご飯も無いアルか？」

神楽が、大声で言う

「たぶん、フライドチキンなら
中のお店にあると思うけど・・・」

少しビビり気味で少女が言う

「行くアルウウウウウウ
待ってろフレイドチキン」

神楽が、叫びながら
もうダッシュで中に入っていく

「銀さん、神楽ちゃん行っちゃいましたよ」
「いいんですか？」

「いいだろ別にどうせ展開的に
俺たちも入るんだから」

そこへ、少女が言う

「あのおっ
いつまで私は、少女なんでしょうか・・・」

「それは、あなたが名乗るまでで
しょう」

「えっじゃあ、ルーシイっていえば
なるんですか？」

そうやって、ルーシイが、言う

「ほらなった！」

「おい

名前ってそんな仕組みだったんかい！」

新八が新たな真実を知って
突っ込む

「じゃあ最初から名前いえば
いかったんですね」

「いや何、ルーシイさん
納得してるんですか」

そこへ、銀時が

「じゃあ、いろいろ知れたところで・・・」

「いや、なに勝手にいろいろ知ったことに
してるんですか」

「今まで、ルーシイさんの名前しか
知れてませんよ」

「いや、ほかにも知れたぞ
中の店に、フライドチキンが売ってるか
もしれないって」

「・・・・。」

「フライドチキン・・・・。」

「ルーシィさん、神楽ちゃん大丈夫なんですか・・・」

「たぶん、中にマスターとかいるんで、大丈夫だとは、思いますが」

「てかさろそろ中入ろうぜ

朝飯くってねえから

腹減ってきたんだけど」

「そうですね」

中へ、入ると・・・

「遅いアル！銀ちゃんたち」

フライドチキンを食べている
神楽がいた

「おお神楽あったのか
フライドチキン」

「銀ちゃんたちも食べるアル！」

って、神楽ちゃん
なに店のもの、勝手に食べてるの
お金払たの？

「あ・・・」

「あ・・・じゃないよまったく
どうするのそのお金・・・」

「銀さんも何とか言ってくださいよ」

そう言われると

「おい神楽、こういうときは
まず謝れ」

「いやネ一人で謝るなんて
銀ちゃんも食べたんだから一緒に謝るね」
「ついでに新八も」

「えっついで・・・僕、ついでなの」

「まあ、とにかく・・・」

「」「すみませんでしたああああ」「」「」

店の定員に3人が大声誤っていると
このギルドの
マスター、マカロフが話しかけ
てきた

「おおお騒がしいと
思ったらただの客か・・・」

「えっとこの店の店長さん？」

「店でも店長でもないんじゃないが・・・」

「あっそうでしたね、えっと・・・
あっギルド！の・・・」

「マスターじゃ！」

「名前は・・・」

「あっ名前なら大丈夫です！」

「えっとマカロフさんですよね！」

新八がさらっという

「なぜ名前知ってるんじゃない」

「えっだって書いてありますし・・・
上の方の分の所に」

「なあマカロフさんよ・・・」

「この、神楽って言う大食い娘が
店の商品ただで食っちゃったんだけど・・・
」
「どうすればいいですかね・・・」

銀時が、もうしはわけはそうに言う

「よい、よい、このぐらいの子は食べ過ぎぐらいの方がいいからの！」

「でもさすがにただ飯は・・・」

「じゃあこのギルドに入りクエストで、金を稼いでこい！」

「じゃあ・・・必ず返すんで、このパフェ食べていいですか！！！」

「何銀さんいきなり・・・」

新八があきれた声で言う

「腹減ってんだよこっちは」

「よいぞ！」

「ん、じゃあいただきます！」

「銀ちゃんイイアルナあ〜」

「おぬしも、もっと食べてよいぞ！」

「フウ〜やったアル！」

「あの・・・。なんかすみません」

「そういえば、このギルドの名前
何て言うんですか・・・？」

「フェアリーテイルじゃ！」

NO. 4 きっかけは、フライドチキンから（後書き）

なんか、最近

投稿してなくて

すみませんでした・・・

こんな感じで

全然、投稿しないとき

普通にたぶんこれからも

あると思います・・・

by 鈴刀

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2992p/>

S I L V E R T A I L ーシルバーテイルー

2010年12月19日00時23分発行